

カナダ滞在記

矢口博久

Division of Physics, National Research Council, Ottawa, Ontario K1A 0R6, Canada

筆者はいま、NRC (National Research Council of Canada) の Research Associate としてカナダの首都オタワにいる。こちらにきて約1年半の歳月が流れたが、その間に私が見たり聞いたりしたカナダの様子を思いつくままに書いてみたい。

カナダはソ連に次ぐ世界第2位の領土をもつ。しかし、6,500 km に及ぶ米加国境に沿い幅 300 km ほどの帯状地帯に人口の大部分が集中しており、カナダの自然条件および発展過程が東西の連携よりも南北、つまりアメリカとの関係を密接にしている。これは経済的にも政治的にもアメリカに対するカナダの自主性の問題となっている。研究の分野でもこのことがいえ、国内の学会活動はあまり活発でなく、Optical Society of America などのアメリカの学会に多数のカナダ人が参加しているという現状である。

NRC 全体の様子については、すでに東大物性研の渡辺俊太郎氏による「NRC 滞在記」(本誌 1981 年, 10 巻 6 号) に詳しいので、ここでは私の所属する物理部、さらに光学研究室を少し紹介したい。物理部は光学、音響学、電気と時間標準、熱と温度測定、高エネルギー物理、レーザーとプラズマ物理、機械光学物理、写真計測、ソリッドステート、X線と放射の 10 研究室で構成されており、約 120 名の研究員とほぼそれと同数の技術員がいる。研究室の名前からわかるように、政府の機関ということもあり、公共へのサービスや標準、calibration の仕事も行なわれている。物理部にはこのほかにコンピュータ、デザイン、機械部品工作、光学部品工作、電子工作の五つの supporting グループがあり、各研究室からの要請による設計や工作を受けもっている。

光学研究室の構成は研究員 13、技術員 8、客員 1、学生 1 である。室長は現在国際照明委員会 (CIE) の会長で *Color Science* の著者としても知られている Dr. Wyszecki である。彼は色彩工学の分野で日本にも大きく貢献し、日本色彩学会から名誉会員に推され、その日本語の推薦状が額縁におさまり彼の部屋に掲げている。これが届いたときは私が英訳をさせられた。光学研究室

においても標準に関する仕事が多く、測光測色の研究には実績がある。私は色覚研究のプロジェクトグループに入っている。世界に 3 台しかない Stiles の trichromator (日本には電総研にある) があり、私もこれを使って実験をやっている。いま視覚研究で有名なミシガン大学の Alpern 教授が、sabbatical で NRC に来られているが、彼といつもこの trichromator の取り合いをしている。この装置には 1 人の技術員が一日中つきっきりで、彼と trichromator は一心同体といったところである。カナダ人は仕事は仕事、休暇は休暇と割り切っており、よく長期休暇(1か月以上)をとる。彼の場合も例外でない。初めのころは困ったこともあったが、最近では慣れてきたのか、彼がいなくなる前にここまでやっておこうといった具合で、かえって計画的に実験を進められるようになってきた。この装置ができてからもう 20 年以上にもなり、その間多くの論文を生み出し、現在も等色実験ばかりでなく比視感度、閾値、Stiles-Crawford 効果の研究に用いられている。これと同じころにできたユニークな 7 視野測色計があり、これは色差の研究に活躍した。しかしこのほうは最近 out of order になってしまった。最近ではコンピュータグラフィックの波が押し寄せ、われわれのところでも色差や閾値の実験に用いられている。これは trichromator のようにレンズやプリズムで構成された光学装置とは異なり、一度システムができあがれば、実験プログラムを作りさえすれば種々の実験ができ、柔軟性に富んでいるので、今後視覚研究の分野にはさらに広く用いられると思う。

光学研究室にはこのほかに、測色、放射測定、レンズ設計、コヒーレント光学、ファイバー光学、電子デバイス、センシトメトリーなど数えあげると研究員数より多いプロジェクトグループがある。当然、複数のプロジェクトグループに顔を出している人がいるわけである。

NRC の職員の生活は、8時半ごろ出てきて、5時ごろになると帰る。その後、外に飲みに出るといった話は聞いたことがなく、誰もがわが家に直行しているようである。6時ごろになると建物にはガードマンしかいなく

なる。午前と午後約 30 分ほどコーヒータイトがあり、冗談を言い合う。英語のジョークはほとんどわからないが、こちらではとくにチームワークが大切なので私も顔を出すことにしている。どうみても日本人ほどは働かないが、どちらがよいかとなると私にはわからない。

さて NRC の話はこのくらいにして、日常生活のことについて少し触れたい。こちらに来るまで、言葉の問題がやはり心配であった。カナダでは英語とフランス語が公用語であることは知られているが、実際にフランス語が使われているのはケベック州である。オタワはオンタリオ州とケベック州の接点に位置するので、住民も英語あるいはフランス語だけを話す人、英仏両語を話す人、いろいろである。さらにカナダは移民の国といわれるだけにいまなお移民が多く、カナダ全体で約 50 人に 1 人はまったく英語を話せない住民がいると聞いている。このような社会背景からか、カナダ人は言葉に関しては実に親切だし、州の教育委員会や地域のボランティアによる移民のための無料の英語教室があちこちにある。私も 1 年ほどこれに通った。英語が上達することはなかったが、何とかなるといふ度胸だけはついた。家の中にとじこもりがちな婦人達もこのような教室に通い日本人ばかりでなくいろいろな国の友達を作っているようである。

医療についても心配したが、医療システムも合理的にできており実際に困ったことはない。こちらにきたとき、家内が妊娠していたので、真先に医療保険の手続きをし、ホームドクターをさがした。後はホームドクターが、定期検診、入院の手続き等、すべて指示してくれた。こちらでは父親も病院での産前教室に参加するのがふつうであり、私も参考のため参加していろいろと勉強させられた。また出産にも立ち合い、母親より早くわが子を抱けるという恩恵にあずかれた。

カナダの冬は長い。しかし、こちらの冬は暗いイメージはまったくない。晴天の日が多く、人々は老いも若きもスキー、スケート、ホッケー、カーリングと積極的に冬を楽しんでいる。雪が溶けるとあっという間に町は花であふれ、春は短く過ぎ、すぐ夏になる。夏時間を使っていることもあって夜の 9 時ごろまで明るく、夕食を自分の家の庭や公園でとる人が多い。森と湖が多いので、カヌーやボート遊びが盛んであり、月曜の朝など、カヌーを積んだままの車で出勤する人も見かける。秋はまた紅葉が見事で、山々が真赤に染まり、大空を何十羽ものカナダ雁が帯状になって南へ渡ってゆくのが見られる。何といってもカナダは自然と親しむには最高のところである。

最後に、今後こちらに来られる人のためにも「オタワ在留日本人研究者の会」についてこの紙面を借りて紹介したい。オタワに住む日本人の大部分は大使館関係者か NRC やオタワ大学などにいる研究者である。こんな背景から日本大使館の方の呼びかけにより、この会が昨年 3 月に発足した。オタワでの生活を円滑に送るための相互援助と充実した研究の促進のための交流とを目的にしている。現在、会員は 28 人、旧会員（発足後すでに日本に帰国した会員）20 人で、毎年名簿を発行したり講演会を行ったりしている。会員の大部分は 1、2 年の短期滞在者であり、生活していく上で同じような問題にぶつかることが多く、そんなときにこの会を通じて情報交換が行なわれたりしている。名簿は婦人達の電話帳として活用されている。こんな日本人間の集まりもあるが、本当にカナダの生活をエンジョイするには、こちらの人の中に積極的に飛び込んだほうがよいと思い、これからもそうしようとしている。

(1984 年 4 月 25 日受理)

昭和 58 年度冬期生理光学研究会報告

奥山文雄

東京医科歯科大学医学部眼科 〒113 東京都文京区湯島 1-5-45

毎年、恒例の冬の生理光学研究会が光学懇話会・生理光学研究グループの主催で、1 月 21 日から 23 日までの 3 日間、草津温泉の草津グリーンハイツで開催された。

この研究会は心理学・生理学・工学・医学などから視覚系に興味・関心がある研究者が研究成果を報告し、納得のいくまで議論し合うことを目的として、例年、夏と冬に開かれている。前日は 15 年ぶりの大雪が関東地方